

9

ブールハーフェ (1668–1738) の『箴言』における
疾患概念について

坂井 建雄

順天堂大学医学部

ブールハーフェ Boerhaave, Herman (1668–1738) はライデン大学の医学の教授で、ヨーロッパ中から多くの学生を集めて育て、その後のヨーロッパの医学に大きな影響を与えた。『医学教程 Institutiones medicae』(1708) と『病気の認識と治療に関する箴言 Aphorismi de cognoscendis et curandis morbis』(1709; 以下『箴言』と略記) は、ブールハーフェがライデン大学の教職についた初期の著作で、ブールハーフェの名声を大いに高めるとともに、翻訳版、注釈版も含めて多数の版を重ねた。『医学教程』は、生理学、病理学、徴候論、衛生、治療論、解毒薬の5部に分かれ、疾患と治療についての理論的な基礎が扱われる。これに対し『箴言』はそれぞれの疾患について病態、診断、予後、治療などを扱う実用的な医学書である。『箴言』で取り上げられている疾患を調査することにより、ブールハーフェがどのような疾患概念を有していたかを知ることができる。

『箴言』1715年版では1495文からなり、文に番号を付している。本文中に疾患項目の見出しをつけて98の項目を区別している。項目を調べると、6群に分けることができる。第1群の体質性の疾患には、組織を構成する線維の病気、体液による病気、循環の異常による病気など13項目が含まれる。第2群の外傷性・体表性の疾患には、出血、痙攣、脱臼、炎症、壊疽、癌など19項目が含まれる。第3群の全身的な熱性疾患には、悪寒、熱性振戦、腐敗性持続熱、間欠熱など21項目が含まれる。第4群の局所的な急性疾患には、フレンティス、アングナ、胸膜炎、卒中など21項目が含まれる。第5群の慢性疾患には、麻痺、狂犬病、壊血病、肺癆痰、水腫など14項目が含まれる。第6群のその他の疾患には、妊婦の病気、子供の病気、天然痘、性病、結石など11項目が含まれる(最後のくる病とリウマチは、1715年版での追加)。

ブールハーフェは疾患として認知すべきものを『箴言』の項目としてとりあげたが、今日的な疾患とは異質なものも含まれている。①固有の名称のない疾患が含まれる(第1群)。②外傷が含まれる(第2群)。③熱による二次的な症候が含まれる(第3群)。④妊娠、出産などが取り上げられている(第6群)。『箴言』における疾患の概念は、固有の病因と発生機転に基づく病態生理的なものではなく、症状と経過から区別される自然分類的なものであったと考えられる。またブールハーフェは当初から疾患の区別を明確に意識していた訳ではない。疾患を区別する項目見出しは『箴言』の初版(1709)にはなく、1715年版において登場することから、『箴言』の執筆・刊行後に明確になったものである。

『箴言』は、多数の疾患を取り上げて臨床上に必要な事項を記述するという臨床医学書の新しいスタイルを、試行錯誤の上に作り上げた。これ以前に出版された臨床医学書の代表的なものには、アヴィケンナの『医学典範』、フェルネルの『普遍医学』(1567)、リオランの『普遍医学提要』(1598)、ヘウルニウスの『医学教程』(1601)、シュタール『真正医学理論』(1708)などがあるが、ブールハーフェの『医学教程』と同様に疾患と治療についての理論的な基礎を扱ったもので、個別の疾患項目を扱ったものは見当たらない。

『箴言』によって始まった疾患を列挙するという臨床医学書のスタイルは、ソヴァージュの『方式的疾病分類学』(1763)から出発した疾病分類学で発展し、疾患名が網羅的に列挙・分類されて、疾患は固有の名称をもつ個別的な存在になった。この存在論的な疾患概念は、今日の病態生理的な疾患概念の源流であり、ブールハーフェの『箴言』はさらにその原点であると考えられる。